

経済学と私

後 藤 文 治

私は、昭和四十四年四月新設科目・国民所得論の担当者として、本学に赴任して来たが、汲々として日々を過ごしているうちに早くも十二年の歳月が過ぎ去って、本年度末には定年退職の時期を迎えることとなり、駒隙の感をひとしお深くしている。

今独り静かに、私の前半生にまで遡り、過ぎ来し方を振り返ってみると、時代の目まぐるしい変転の中で、かなり迂余曲折した人生航路を辿って来たとの感が深いが、しかしながら、生い立ち、進学、就職、転職といった経路を通じてみて、現実的ないし表面的には迂余曲折のコースを辿ったにせよ、底流においては、経済問題の解明ないし経済学の研究に対する志向が一貫した命脈をなして来たように思われる。

この度、私の細やかな経歴を物語る機会を与えられたことをまず前以て感謝するとともに、経済学と私の関り合いについて、独見の惧れも顧みず、略記させて戴くこととする。

(私の生い立ち)

私は一九一五年大分県国東半島東南部の田舎町に生まれ、町内所在の県立中学校を卒業するまで、他県に一本も出ることなく、井の中の蛙として幼少期を過ごした。この私の出身の町というのは、その昔小藩の城下町であ

った杵築という町（近年国東半島の観光ブームに乗り、「小萩」とも呼ばれている。）であるが、文教に熱心な伝統をもつて聞こえ、この小天地から偉人傑士を多数輩出していることが郷土人の大きな誇りとなっていた。

当時、私の生家は町の表通りで一軒の商店を構えていたものの、折からの不況と父の大病が重なって、家運頓に零落を続け、私の中学進学も家計不如意の面から絶望に落ち込んでいた。そこで、私は子供心にも意を決し、自ら学資を稼ぎ出すことを約して進学に踏み切り、それを実行して卒業に漕ぎつけることができた。幸い学業成績も首位を占めることができたので、町の人々から感心な息子との評判を受けたものの、その反面、貧苦故の悲哀と屈辱に耐え兼る思いをさせられたことも多く、今以て忘れ難い嫌な思出となっている。そのような時、私の発憤の糧となったのは、前述のように、この郷土から数多くの人材が輩出されており、しかもそれらの人々の多くは貧苦の中から志を立て、自己を厳しく律しながら、余人とは異なった刻苦勉強を続けた上で、ついに大成するに至ったという伝記や挿話を聞かされることであった。

それはともあれ、当時におけるこの町の不況も、いわゆる世界大恐慌（一九二九年）の余波に席捲されたものであったことは、後日経済学に接するようになってから初めて知り得たことで、当時の私としては、経済というものの為体の知れない恐しさにただ戦くばかりであった。

（学問研究に対する憧憬と先哲）

私は、右に述べたような環境の中で、専ら先人の足跡に強い感化を受けながら、途方もない夢を将来に托す井の中の蛙として成長して来たが、そうした中で、夙く幼少の時から現在に至るまで、学問研究に対する憧憬を抱くうえで、私に最も大きな感化を与えて来た郷土の先哲として、三浦梅園先生のことを言い落すことはできな

い。

三浦梅園先生は世に「豊後聖人」と尊称される高德の碩学で、郷土人の齊しく欽仰するところとなっているが、全国的には必ずしもひろく知られていないので、ここにその偉大さを略記して紹介すると、先生は今から二百年余り前の時代に、私の町からさらに十二料余も奥まった山里に一生を送った稀代の大学者であって、世俗の名利に捉われず、ひたすら独創的な究理の思索を続け、時代の水準を遙かに超越した独自の世界の学問を切り開かれたのであった。先生の志した学問の領域は、家業に関する医学だけでなく、漢学、国学、天文学、哲学、論理学、はては経済学といったように、今日に言う科学の範疇のほぼ全般に及ぶものであった。しかも、その主著、

「梅園三語」（支語、贅語、敢語）に示された哲理研究はカントのそれに対比され、そこに説かれている正反合一の論理は弁証法的思索方法に通じ、また「侂原」に説かれている学問領域はアダム・スミスの国富論に対応するものと評価されている。なお、ここで驚くべきことは、西欧の進んだ学問とは全く交渉もたなかった日本の徳川中期の頃に、しかもこのような辺鄙な山里で、名利を離れた孤独の思索・研究の中から独自の学問を切り開き、それぞれの学問領域で、世界の泰斗と目される大学者の学問の内容や水準に通ずる理論体系を打ち立てたということであり、また奇しくもそれらの大学者はほとんど年配を同じくしながら、互いに相知ることもなく、遠く離れた東西の国で、全くの同時代を生きたということである。

私は幼少の時から、先生を記念した小図書館「梅園文庫」に入り浸るなどして、子供心にも畏敬の念をもち始めたのであるが、長ずるに従い、先生の厳しい中にも拘るところのない生活態度や非凡な学風の真髓に対する認識を度重ねて新たにして来た。それによって、私の先生に対する私淑の念は深まるばかりで、私の人生における

発憤奮起の原動力ともなり、起爆力ともなっているのである。

就中、経済学の研究と関って、私に大きな衝撃を与えた一例を挙げると、先生は前記の「佃原」にグレシヤムの法則と全く同一主旨のことを喝破されていたことである。しかも「悪銭世に行わるれば良銭隠る。」というように、グレシヤムの法則にいう「悪貨は良貨を駆逐する。」といった言句よりも、その主旨の真意をより適確な表現によってとらえていることに、私は言い知れぬ感銘を覚えたのであって、これにより、私の経済学研究に対する志向は決定的な拍車を受けたのであった。

(東亜同文書院に入学)

それはさて置き、中学を卒業するとなると、上級学校進学の問題が、中学進学の場合とは比較にならない重大さと困難さをもって、私の前途に立ち開って来た。

私の置かれた境遇は、中学の卒業を前にして、母を失い、弟妹もそのため離散に追いやられるなど、さらに逆境の度を加えて来て、上級学校への進学は到底望むべくもなかったのであるが、やはり向学の心止み難く、考え詰めたところは、蹶然上京して、当時に言う苦学の道を選び、私大夜間部に入学などして、生活と勉学を自力によつて両立させながら、目指すところは、学歴ではなく、司法試験あるいは高等文官試験などの国家資格試験の最高峰を狙うことであつた。なお、一般の進学コースを目指した場合、学資支弁を援助するとの同情ある申越しを二、三受けたこともあるにはあつたが、家運零落の中から垣間見た社会の柵みに対する嫌悪から、人の温情に頼ることを潔しとせず、敢て困難な方途に挑戦する考えを固めたのであつた。

然しながら、私の人生コースは、右の決意と方針がすでに軌道に乗りかけようとしていた寸前で、大きな転回

を見ることとなった。つまり、郷土から東に向かって上京し、苦学に就くところであったのに、逆に、西に向かつて中国の上海に渡航し、同市所在の東亜同文書院に県費の支給を受けて留学することとなったのである。

このような急転回の大きな動機となったのは母校杵築中学の大先輩であり、当時日中外交に重きをなしておられた重光 葵大使（終戦時の外務大臣、ミズリー号上での降伏調印式に臨まれた。）にお会いする機会をもったことであつた。その頃同氏は上海での遭難後、暫く別府で療養しておられたが、私は、ある人の勧めを受けて単身宿舎にお伺いし、親炙に与かることができた。その時、この一無名少年が緊張の極の中から将来の抱負を述べるのを、この大先輩は腕組みをしながら、ゆっくりと聴き取られた上、「もっと世界に眼を向けてはどうか。これからは日中間の経済協力がますます重大となって来る。東亜同文書院への進学を考えてみてはどうか。県費派遣生選抜試験に合格すれば、学費の心配も無くなる。」と、勧めかつ励まして下さつたのである。私は本来の私の方針を変更することに自分の間躊躇を感じていたが、再び自分なりに根本的な熟慮検討を加えた上、この大先輩の示唆された方向に向けて、自分の目指す人生コースの舵取りを急旋回させたのである。

この東亜同文書院という学校は、戦後自然廃校となっているが、日中の経済交流面で活躍する人材を養成することを目的として、明治中期に創立された、伝統の古い学校であつて、教科内容は商科系統を主としていた。私はこの学校に進学したことにより、経済学の本格的な学習や研究との直接的な関り合いを初めて持つこととなつたのであり、そうした中から、しだいに中国経済の研究の新しい開発に注目するようになったのである。

（満鉄調査部に就職）

さて、学業を終え、就職先を選ぶ段になって、私は躊躇することなく、在学中から第一の念願と定めていた満

鉄調査部を選んだ。この調査部の業務は、社業調査の範疇とは全く異なり、いわば経済研究所的な性格のもとに、中国経済を主な研究対象として、学術的な調査分析を組織的に行なうことを専らの目的としているものであった。そこでは、私は理論分析よりもむしろ実態調査の分野を志向し、オリジナルな研究成果を積み上げていくことに学問的な魅力を感じていた。

しかしながら、戦争の行方の逼迫化に伴って、この種の調査分析の実施はしだいに困難となり、ついには終戦により断絶の止むなきに至った。このことは、私にとって救いようのない心残りとなっているのであるが、それより大変なことは、あらためて言うまでもなく、ここで私の人生コースは、外地にあった他の人々と同様に、全く頓挫するに至ったことであった。

(終戦後の混乱期を経て国家公務員となる)

戦後一年半の抑留生活を経て、私は中国から故国へ引き揚げ、懐しい郷土に立ち戻ったが、お多分に洩れず、生活の基盤も見出せないままに、数年を虚脱と困惑の中で過ごした。

その後たまたま昭和二十五年シャープ勧告によって実施された国税調査官採用試験に合格したことから、国家公務員となるとともに、税務行政に従事することとなった。

その頃、この職務研修を通して遅れ走せながら、ケインズ理論を中核とする新しい経済学の盛行を知るとともに、所得概念についても、ミクロ的視点とマクロ的視点との間に大きく相違するところがあることに、学究的な関心を持ち始めるに至ったが、この時期において修得した税務計算上の知識が、つぎの時期で国民所得の基礎理論や統計体系を理解し研究していく上で、大きな下地として寄与することとなった。

(わが国の公式国民所得統計の推計を担当)

昭和二十八年私は経済審議庁調査部国民所得課に外向し、その後長年にわたり、わが国の公式国民所得統計の推計作業に専ら従事することとなった。ここで私は国民所得の実際的な調査分析を実施として行なっていく機会を与えられることとなったのであるが、これは私にとって願ってもない好運に恵まれたものと言ってよかった。

ついで昭和三十三年同課が経済企画庁経済研究所国民所得部に組織替えされ、その後同部を事務局として、国民所得勘定を中核とする国民経済計算の整備改善を目的とした調査委員会や審議会などが引き続き設置されることとなり、国民所得の推計作業や調査分析には国連提示の国際標準方式の適用を中心課題とした学術的な調査研究や審議検討が本格的に加えられるようになった。それによって、実務面と学究面の相互裨益が着実に進み、わが国の国民所得統計は国際的にみても名実ともに先進諸国の先頭に立つまでに、顕著な普及発展を遂げるに至った。その間、私は、同国民所得部における役職が班長、課長、部長と進むにつれ、上司あるいは関係の委員長ないし委員を務められた、わが国経済学界の泰斗ないし著名な近代経済学者など、多くの方々の人格や学風に親しく接することができた。このことは、経済学と私の関り合いを深めていく上で、直接間接に大きな恩恵を享受したものととして、今もって感謝に耐えないところとなっている。

(本学部に国民所得論担当者として奉職)

昭和四十四年四月私は経済企画庁経済研究所国民所得部長を辞職の上、本学経済学部の新設科目・国民所得論の担当者として奉職することとなった。

私は本学奉職にあたりいろいろなことを考えて一大決心を要した後、心中大きな抱負と不安を同時に抱えなが

ら赴任して来た。抱負というのは、本学に初めて国民所得論が新設されることとなったと聞き、私のような実務経験者としての研究経歴の特色を十分に生かしていきたいものと考えたことである。わが国の公式国民所得統計ないし国民経済計算は、私とその職務を離れた後も、日進月歩の整備拡充を続け、往時を振り返ると、まさに昔日の感ありといった普及発展をみているが、幸い私としては、前職の関係から新しい成果を逐次吸収していく便宜に恵まれることとなり、常に前向きな観点から、この抱負の実現に微力を尽くして来たつもりである。

その反面にある不安というのは、私自身の本来の素質に関することであるが、往時から私自身としては、(進学指導の担任の先生を始め、他の人々が異口同音に教職コースを推奨してくれたにも拘らず)教職者となるべき資質や適性を持ち合わせていないと思ひ込んでいたところに、運命の導きと考えるにせよ、五十歳半ばにして始めて大学の教職者に就任することとなったことから来る信念不足であった。この不安は、私の赴任後、なおも大学紛争の余波が激しく揺れ動いたため、私自身の覚悟や予想を遙かに上回る振幅をもって倍加されることとなったが、私はこの不安を自分自身の問題として受け留め、自分なりにその決着を質す意味で、身近の学生とできるだけ深く接触し、意志疎通を図ることに努めて来た。このような目的の一環として、担当ゼミの運営については、学修活動のみならず、課外活動の活発化に積極的な努力を傾注して来たが、幸いにして、意欲的なゼミ生の共感をかち取ることができ、わがゼミとしての伝統を築き上げていく中で、卒業後におけるOB会の活動もまた着々と進んでいることを心頼もしく思っている。その活動の一例をあげると経済白書学習のための合宿なども毎年行なわれているが、社会人となっても続く経済学との触れ合いの場として楽しまれている。

しかしながら、これらの僅かの例を除き、私が赴任以来心中に持ち続けて来た抱負と不安に対しては、全般的

に見る場合、定年退職を前にした現在においても、自分なりに満足できる結論を得ないでおり、今にして、もっとより積極的にすべきであったこと、すればよかったことなど、あれこれと思い返されるのであるが、最早藉るに時日なく、詮もないこととなった。

ただ幸いなことに、私が長年にわたり、わが国の国民所得統計や県民所得統計などの進歩や普及発展に直接間接に貢献したという望外の社会的評価を受けて来たことよって、本学奉職中、さきには昭和四十七年十一月宮内庁主催の赤坂御苑遊会に招かれ、さらには昭和五十五年十二月大内兵衛博士の偉大な業績を記念する「大内賞」受賞の榮譽に浴すことができた。これは定年退職を前にした私にとり、無上の記念をなすものとして、感慨を深くしているところである。

思えば、本学奉職の、この十二年間は、私の迂余曲折の人生航路が経済学の研究との関りを直接間接に志向して来たあと、専ら専門的ないし教学的立場からの学術的研究に従事する機会を与えられたものであって、常々果報を感じずるばかりであった。

それにもかかわらず、その間、健康上の理由があったにせよ、何ら見るべき研究成果をまとめ得なかったことを考えると、あらためて心中汗顔の思いを禁じ得ないが、幸いにも自己の責務を一応曲がりなりにも全うし得たことは、本学部の諸先生方を始め、関係の方々が陰に陽に与えて下さった御温情の賜物以外の何ものでもなく、この感銘を胸中深くに刻み込みながら、私はやがて、この懐しい学園から退いて行くこととなっている。

(終)